

# 田中〈里から都市へ〉



田中神社 本殿と拝殿

旧田中村は、北を一乗寺村と山端村やまはた、南は吉田村、東は白川村、西は高野川に接した集落です。古代は蓼倉郷たぐらに含まれたともいわれていますが、下鴨神社の社領であったことは間違いないかもしれません。

下って十五、六世紀には、田中の産土神うぶすまがみである田中神社を中心として「田中構かま」という環濠集落が存在していました。郷民は団結して自主防衛のため構を形成して、生活圏を守ったのでした。その遺構は明治時代末期まで残っていたといえます。田中郷の地侍であった渡辺氏は、田中から一乗寺辺りにかけて勢力をもっていたらしく、構の造成に手腕を振るい、田中郷の自衛に大きな役割を果たしたと考えられます。その田中構も天文五年（一五三六）、天文法華の乱の時、法華衆徒に放火され、またその後も焼失などによって、元龜三年（一五七二）以降は記録にあらわれなくなりました。渡辺氏自身とはいえ、將軍足利義昭に与くみするようになり、織田信長に対抗したことによって田中から追われますが、天正十一年（一五八三）には、田中の庄屋として渡辺弥十郎の名前がうかがえます。したがって、渡辺一族



往時の面影を思わせる田中神社境内

は田中郷での指導的立場を失っていなかったことがわかります。

江戸時代、田中の村高はおよそ九五〇石で、三十五領主もの入組支配となっていました。耕作においては、その核となる高野川の水を太田井堰（一乗寺村）から分流させて、一乗寺・田中・松ヶ崎・下鴨の各村が用水として利用していましたが、村同士の度重なる用水争論は何と明治時代まで続きました。

寺院では百万遍念仏で知られた知恩寺や、六斎念仏が盛大に催された干菜寺の存在は、市中に広く知られていました。田中は近郊農村として静閑な集落でしたが、明治以降は工場地帯として変貌し、大正十四年（一九二五）には京都電燈叡山線（現叡山電鉄）出町柳駅を基点として市街化が一気に進みました。すっかり都会となった田中ですが、ところどころに往時の面影は残っています。

# 下鴨 〈神域の集落〉



平安時代の糺河原〈北側から遠望〉(平安京復元模型)

下鴨神社(賀茂御祖神社)の神域に位置した集落が下鴨村です。都の近郊農村として発展し、江戸時代においては下鴨神社が村里を統括していました。現在は建物が密集した都会ですが、神社が鎮座する一角は糺森と呼ばれ、昔ながらの景観と静寂さを伝えています。賀茂川と高野川の合流付近は糺河原ともいいますが、往古は平安京復元模型(写真)をご覧いただいたらわかるように、現代とは全く異なった姿でした。合流して鴨川となる上流部、すなわち賀茂・高野両川に水流はなく、降雨時以外は地表流の存在しない河原が広がっていました。したがって川床の道を利用し、橋はあっても粗末な仮橋程度でした。当然増水の時は、川を渡ることは不可能です。また両川岸は洪水時の堆積によってできた微高地でしたから、治水とはほど遠い状態でした。

中世には、若狭街道への出入口といった交通の要衝であったことから合戦の陣地となったり、また芸能興業も催される遊樂地ともなりました。なお河原は下鴨神社の神域には属さず、誰の私領でもない地域であったことから、そこには多くの石塔が



# 修学院 〈名所旧跡の地〉



江戸時代の鷲森神社（『拾遺都名所図会』天明7年（1787）刊）

修学院は東を比叡山に、西は高野川に面した緩やかな傾斜地に発達した集落です。修学院という名前は、むかしこの地にあった比叡山三千坊の一つである修学院（修学寺）に由来します。天台寺院の修学院は中世中頃まで存在しました。江戸時代の修学院村には、鷲森神社・林丘寺・雲母寺・帰命院・赤山禅院などの多くの寺社が建立されており、参詣人の往来で賑わいました。このような風情のなかで、ひととき異彩を放ったのが修学院離宮でした。修学院離宮とは後水尾上皇の造営になる江戸時代初期の代表的山庄です。万治二年（一六五九）に完成し、文政七年（一八二四）には大修理されています。五十四万平方尺のなかにある庭園や建物などは、現在皇室財産として宮内庁が管理しています。

集落の人びとに産土神を祀る社として信仰されたのは、鷲森神社でした。当初は赤山禅院辺りに鎮座していましたが、応仁の乱の時に現在の修学院離宮の地に移り、さらに離宮造営に伴い現在地へ移転したと伝えられています。『拾遺都名所図会』（一七八七年刊）に描かれた社殿を見ると（写真参照）、現在の



現在の鷺森神社本殿

境内とほとんど変わっていないことがうかがえます。

修学院村の江戸時代中頃の村高は八七三石余で、禁裏御料・仙洞御料・林丘寺領となっていました。北を高野村、南を一乗寺村、さらに東を比叡山と接していたことから、江戸時代前期より延暦寺との山争論、高野村や一乗寺村とは境争論に及んでいます。しかし集落の歩みについては争論の史料だけしか残っているわけではありません。民俗行事としての盆踊りは、現在も「修学院大日踊・紅葉音頭」として行われており、京都市無形民俗文化財に登録されています。

明治二十二年（一八八九）、修学院・高野・一乗寺の三か村が合併して修学院村となり、昭和六年（一九三一）左京区に編入、村制時の三<sup>おおむね</sup>大字は各町名に分離しました。現在の修学院はすっかり市街化しましたが、往時の面影はそこなわれず残っています。